心に残る人生の道しるべ

Wide Young

県内で活躍している著名人に、若き日の思い出をインタビューした「あのころがあるから今がある」。去年四月にスタートして以来、二十人に登場してもらった。年度末の今月は、特別企画『記憶に残る、あの一言』。インタビューの中で、記者の心を打った名言や面白い体験談を集め、今週と来週の二回にわたり紹介します。みんな、心して読もう。

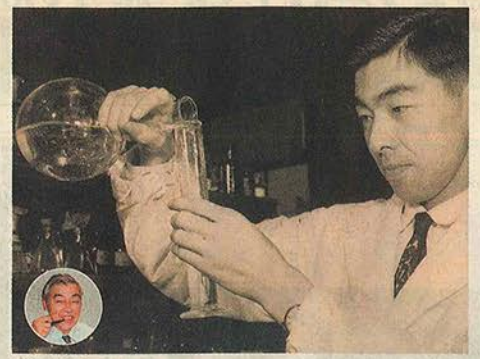
あのころがあるから今がある

誠を果たすための回り道

■空手家・岸信行さん

「母の体の具合がよくないから地元に戻った。大会で勝つより自分自身を鍛える空手を追求したい。自分は、生き方は下手かもしれないけど、巧妙を急ぐ近道より、誠を果たすための回り道が空手道だと思うから、こっちの暮らしも悪くないよ」―ニューヨークから新庄に戻った理由

どうせ拾った命 好きなことに



■米国ラホイヤアレルギー免疫研究所名誉所長・石坂公成さん

「（東大時代）文科系の学生はみんな兵隊に取られていて、いずれ自分も戦死すると思っていた矢先、戦争が終わった。何かいいのか分からなくなった。常識的に考えれば、食うに困らない道を選ぶんだろうけれど、どうせ拾った命なら好きなことに人生をかけようと思ってね」―東大医学部で基礎医学を専攻したきっかけ

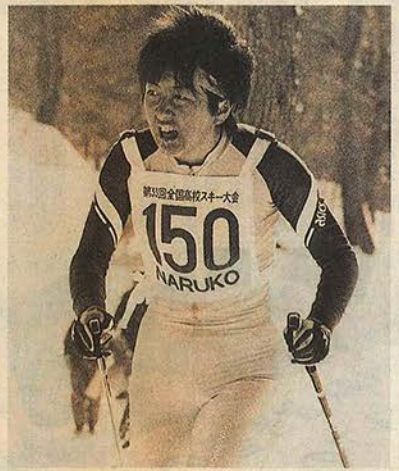
そろそろ好きなこと…

■民謡歌手・大泉逸郎さん

「二十三歳で結婚して、子育てに専念しようと歌をやめた。十年たって、二男も五歳になったから、そろそろ好きなことをやってもいいね」―三十三歳で民謡を習い始めた。家族に内緒でこっそり習い始めたって、迷惑掛けないよなーって（笑）。ちゃんと習いたくて、寒河江市内の教室に通

20人の「あの一言」（上）

じいさんの言葉心の支え



■クロスカントリースキー選手・青木富美子さん

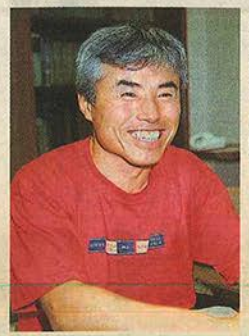
「シーズン中は大会が続くから、競技の後は、過去の失敗にこだわるより次の大会のことを考えないといけない。だから反省はレース中にする。走っている時間が長いから、考える暇は十分にある（笑）。苦しい練習をしているのに、勝たなきゃ面白くない」

失敗こだわらず前向きに「次へ」

■アマゾン研究家・山口吉彦さん

「モロッコで盗賊に身ぐるみはがされて砂漠に置き去りにされた。四日目に通りかかった車に助けてもらったけど、死ぬかと思った。気温は五〇度で、食べ物はポケットに入っていたオレンジ一個だけ。日中はじっとして、夜に気温が下がってから歩いて町を目指した」―一九六七（昭和四十二）年から四年かけてヨーロッパやアフリカを巡り、文献を集めた

身ぐるみはがれ 砂漠に置きざり



■冒険家・大場満郎さん

「真室川町の鷹匠（たかじょう）沓沢朝治さんの哲学に感動して、その精神を体得したかった。『世間体を気にしていると、笑って死ねないぞ』っていう、沓沢じいさんの言葉は今でも心の支えだよ」

80歳になっても ハイレグ着たい

■陸上選手・秋元千鶴子さん

「カメラマンが後ろ姿ばかり狙って、おりりを何度も写された。目立つのは大好きだったから気にならなかったけど（笑）。ハイレグ着たのはアメリカのジョイナーより早いんだから。八十歳になってもハイレグ着て走ることが目標」―日本の陸上女子選手で初めてハイレグのウエアを着用

目をつぶって駆け抜けろ

■直木賞作家・高橋義夫さん

「高校、大学の時は、社会に対しても自分にも、いつも怒っていた。みっともなくて、思い出したくないな。年とってからの方が楽しいことはいっぱいあるから、絶対戻りたくない（笑）。若い人には目をつぶって駆け抜けてしまえ、と言いたいよ」

ワイドヤング